

IMPROVING ACADEMIC PRESENTATION SKILLS

Week 15 Review and evaluation

田中 真紀子

今回は本番に向けてのリハーサルの重要性とその方法、そして緊張を緩和する方法についてお話ししました。

読売新聞の10月9日付夕刊（東京本社発行最終版、デイリーヨミウリでは10日付）に、「涙を流す胚」、「腫瘍ができて涙を流すマウス」と題されたイラストが掲載されていました。ヒトの皮膚細胞から筋肉や血液など様々な組織や臓器に成長できるiPS細胞（新型万能細胞）に関する研究で、英ケンブリッジ大のジョン・B・ガードン博士と共に今年のノーベル生理学・医学賞に選ばれた山中伸弥・京大教授が描いたイラストです。山中先生は、これまでの研究の問題点をこのようなイラストに描いて指摘し、新たな研究の必要性を強く訴えたということです。痛々しく涙を流すそれらの絵は聞く側の心に強いインパクトを与えたとはいえます。

山中先生はプレゼンテーションが上手であることで知られています。山中先生が米国立衛生研究所（National Institute of Health; NIH）で英語で行ったプレゼンテーション*がYouTubeにアップロードされていますのでお聞きになってみてください。山中先生は落ち着いた風貌で登壇して、ご自分の経歴を兼ねながらこれまでの研究成果をお話しされています。医学分野の1時間にも及ぶ長い講演であるにも関わらず、時々吹き出してしまうようなユーモラスでユニークなことをおっしゃいます。山中先生はアメリカでプレゼンテーションのスキルを身につけたそうですが、研究費の獲得から研究発表までプレゼンテーションのスキルというのはとても重要であることを述べていらっしゃいます。日本人がグローバル社会を生き抜くためには、プレゼンテーションのスキルが欠かせないことがもっと広く認識されるといいと思います。

振り返りは進歩のために必須

さて、15回にわたって連載したImproving Academic Presentation Skillsも最終回を迎えました。本番に向けて十分に準備し、練習を重ねてプレゼンテーションに臨み、無事に終わったら安堵（ど）の気持ちでいっぱいになると思いますが、これで全て終了ではありません。プレゼンテーションが終わったら「振り返り」（reflection）をすることが大切です。これを怠ると、次により良いプレゼンテーションを行えません。振り返りは過去に経験した事実を再び意識の中で思い起こすことです。我々の思考を強化し、学習や成長を促進することにつながります。

振り返りは失敗しても成功しても行う

振り返りは、良くなかった点を改める意味で行われることが多いのですが、失敗原因の分析だけでなく、成功要因を考えることも進歩につながります。何が成功をもたらしたのかを考え、それを「成功体験」として記憶に残すことで、次の自信と意欲につながります。

うまく行かないと自己嫌悪に陥り自信を喪失してしまうかもしれませんが、失敗体験はそれを自分がどのように捉える

のかによって、次回に生かせるかどうかが決まります。「貴重な経験を通して自分が未熟な点を認識した」とか「今度は名誉挽回すべく頑張ろう」と捉えられれば、人間の成長につながります。しかし、単に、今度は失敗しないように頑張ろう、では成功には結びつきません。

失敗したと思う場合は、まず、1）良くなかった点を明確にし、2）良くなかったことを認めて、3）それを改めようとするのが大事です。右に、自己評価表を用意しました。15回の解説を通して学んできたことです。この自己評価表を使って、プレゼンテーションが終わったら、時間を空けずにすぐ振り返りをしていただきたいと思います。振り返りを通して自分の課題が見つかる、プレゼンテーションを練習する際、何に焦点を当てたら良いかが明らかとなります。そしてその部分を改善して次回は頑張るようにします。

自己採点してみよう

自分のプレゼンテーションを「大変満足＝5、満足＝4、まあ良い＝3、改善する必要あり＝2、十分な練習が必要＝1」で採点し、合計点を算出してみましょう。そうすると、100点満点中の評価点数が出ます。80点くらいであれば全体に成功したと考えていいと思いますが、さらにスキルを向上させる場合は、点数の低かった項目を集中的に練習してください。リハーサルの方や、それぞれの項目の要点はこれまでに解説してきた通りですので、見直してください。また、自己評価だけでは把握できないことがあるので、友人や先生に評価してもらうことをお勧めします。友人に評価してもらう場合は単に感想を聞くのではなく、この自己評価表に正直に評価点を記入してもらいます。そうすると自分では気がつかない部分が明確になります。人に評価されることを嫌がらないでください。米大統領でさえ、スピーチを指導する専門家がいることを忘れないでください。

覚えておきたい秘けつ

1）ジョークの使用に関して：ジョークを言うべきか、また、どういうジョークを言うべきかに関しては聴衆がどういう人の集まりかにより決めます。相手の年齢やどこの国の人かなど十分分析をしておかないと相手に失礼（offensive）になったり、要らぬ誤解を招いてしまったりすることがあるので注意してください。またよく考えないと分からないジョークは、聴いている人にとって「面白くない」ジョークです。「受ける」自信がない場合は、避けた方が無難です。先の山中教授ですが、先生は医学者という立場をうまく利用して、聴衆を笑わせています。

例えば、先生は研究拠点の米国から引き揚げて日本に帰国してから、PADという精神的な病にかかってしまったと話します。講演に参加している聴衆の多くは医学関係者ですから、PADというのがどんな病だったか真剣に考えるのですが、先生はその病は自分で命名したもので、post-America depressionと言われるものだ、と話されています。そこで聴衆から笑いがドッと沸き起こります。日本での研究環境が良くなかったのも、米国が恋しくなり、「アメリカ撤退後憂うつ症」と



Illustration by Yukako Kawauchi

でも言うべき、うつ状態に陥ったというのです。

先生は、ジョークを言ったあとに「間」を空けて、「ここは笑うところですよ」というシグナルを送り、聴衆から笑いを誘います。冒頭で紹介したイラストもそうですが、先生は聴衆の心を動かすプレゼンテーションのスキルに優れていると思います。

2）最初にプレゼンテーションの結論を述べる：冒頭で、聴衆にトピックやプレゼンテーションを聞くことのメリットを話すだけでなく、主旨や結論を先に述べると、聴衆はそれを念頭に集中して聞くことができます。

- By the end of this presentation/ In this presentation,（このプレゼンテーションが終わるまで／このプレゼンテーションでは）
 - you will see X is the result of Y/ Y causes X.（Yが原因でXとなる）
 - you will learn X should be replaced with Y.（Xの代わりにYを採用すべき）
 - you will know we need an alternative method to solve this problem, and that is to do X.（この問題の解決には別の方法が必要で、Xをすることだ）
 - you will understand X is the way to deal with this matter.（Xこそがこの問題に対応すべき方法だ）

3）発表者に質問する：ここでは発表者への質問の仕方を記しておきましょう。

- Could you go back to the point you made about...?（～についてお話しになった部分に戻ってもらえますか）
- I was interested in your comment on/ opinion about...（～というコメント／意見に興味があるのですが）
- You said that... Could you say a little more about that?（～とおっしゃいましたが、もうすこしお話ししてくださいか）

自己評価表

| チェック項目 | 内容 | 5段階評価 | コメント |
|----------|---|-------------------------------------|------|
| 準備 | 発表前のリサーチを十分に行った | 1 2 3 4 5 | |
| 目的 | 目的を明確に示した | 1 2 3 4 5 | |
| 聴衆の分析 | 1) 聴衆の興味・ニーズに応えた 2) 聴衆に発表を聞く利益を述べた | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 | |
| 構成と内容 | 1) 論理的で首尾一貫している 2) 中心となるメッセージが明確 3) 聴衆の興味・レベルに合っていた | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 | |
| 視覚資料 | 1) ハンドアウトは分かりやすかった 2) パワーポイントは効果的だった | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 | |
| 言語 | 1) 言葉の使用は適切であった 2) 正確に発音した | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 | |
| パラ言語 | 1) 適度なスピードで話せた 2) 間をうまく利用できた 3) 声の高さ・大きさは適切だった | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 | |
| 非言語 | 1) 聴衆にアイコンタクトを取れた 2) 自信のある態度で発表できた | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 | |
| 緊張 | 緊張をコントロールした | 1 2 3 4 5 | |
| リハーサル | 満足するまでリハーサルを行った | 1 2 3 4 5 | |
| 質疑応答 | 的を射た回答ができた | 1 2 3 4 5 | |
| 聴衆とのやり取り | 聴衆とインタラクションを取れた | 1 2 3 4 5 | |
| 合計点 | /100点（総評：） | | |

- I'd like to ask about...（～についてお聞きしたいのですが）
- I'm interested to know...（～について知りたいのですが）

*山中伸弥教授のプレゼンテーションは以下のサイトでご覧になれます。

www.youtube.com/watch?v=AD1sZU1yk-Y&feature=related

約3か月にわたってお送りしたこのシリーズは今日で最終回となりました。これまで記事をお読みくださった皆様、どうもありがとうございました。これからますます自信に満ちた効果的なプレゼンテーションが行えますよう、応援しております。

ONE POINT ADVICE

失敗しても成功しても振り返りは必ず行い、進歩につなげるための糧にします。



田中真紀子（たなか・まきこ）
神田外語大学外国語学部英米語学科教授。著書に「The Essential Guide to Academic Presentations」（マクミランランゲージハウス）など。専門は教育学（英語教育、児童英語教育）、応用言語学。